

最近の”Les Diaboliques”論に関するノート

田中, 栄一

<https://doi.org/10.15017/2332724>

出版情報 : 文學研究. 73, pp.27-37, 1976-03-30. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

最近の“Les Diaboliques”論に 関するノート

田 中 栄 一

「Les Diaboliques」の真実が徐々に明らかになり始めているようだ。殆ど一世紀にわたる無為な放浪の末、遂にその本質に迫り得たと言えよう。甘美な世俗的印象主義や、あるいは、輝かんばかりの文体論よりは、今日では、科学的俊巖さと、高度の精密さが要求されている。多くの時間が“Les Diaboliques”の読書のために浪費された。しかも、ごく最近までは、その研究の総和はごく小さいものであったが、やっと texte から、確証し得る、決定的な観察が引き出され始めると判断せねばならない」¹⁾

上記の引用は、Philippe Berthier の“Les Diaboliques et la critique française”からのものであるが、この総合的な「Diaboliques 論の推移」とも言うべき論考は、1874年の“Les Diaboliques”発行より時代を追って批評の流れを、次の各時期に分けて検討したものである。即ち、

le premier sillage	(1882—1903)
autour du sens	(1904—1931)
verifications et amorces	(1939—1961)
vers les textes	(1963—1973)

であって、以上の時期を経て来た Barbey d'Aureville 批評の結論的見地が、上記の引用した個所である。「Diaboliques 論」の過去の推移変化は、このノートでは取り上げない、最近十年間の重だつたものを、Ph. Berthier にそつた形で検討して行くのが、この小さなノートの目的である。

最近の“Les Diaboliques”の édition としては先ず Garnier 版(1963)

が挙げられねばならない。これは、Jacques-Henry Bornecque の手になり、特にその全一卷の約三分の一を占める「序文」は“Les Diaboliques”の新しい lecture の方法論を提示したものと見て注目すべきである。単に既成の文献を集大成するにとどまらず、興味ある新しい問題を数々提起している。「Bornecque は、今まで進められていたこの小説の prototype, いわば, “clefs” の探求の、時としての行き過ぎを否定している。しかしながら、これまでに無視されていた Baudelaire の影響を力説している」²⁾。更に、Berthier に従って、Barbey d'Aurevilly の作品と、彼の超越し得なかったある種の若き時代の fantasmes についての Bornecque の言葉を再録すると、

「勝利なき彼の感受性の流れにおいて、彼は若き頃より、ある少数の支配的なイメージや思想が、強固に連合しあって彼につきまといいたように思われる」³⁾

こうした支配的イメージや思想は、そのあるものは先天的なものであり、「回帰的」でもある。Bornecque はその一つに“chronisme”を挙げている。“rouge”は愛と血の色で、残酷な心情の吐露、幸福な隷属を表徴し、更にこれを補足する色が“blanc”であって、小間使いのエプロンの色、屈従の表徴で、社会的義務に閉込められた、秘めたるものを表している。こうした内奥より、三つの相対峙する力が、内的な結合を見せる。即ち、「残忍性」、「偉大さ」、「屈従」とがそれである。⁴⁾こうして Bornecque は、この書の成立、作者の人物像より始めて、その création と atomosphère, 更に創作の技法、魂の執念、ひいては物語の深い意味、必然性などを精密に分析検討し、Barbey d'Aurevilly の écriture の最深部、そして最も暗い最も激しい場にわれわれを置くのである。この場合こそ“Les Diaboliques”の世界であり、作者の idée fixe の世界であるとする。既ち、「沈黙」と、「假面」と、「虚偽」の世界である。⁵⁾ここには自然描写がない。自然は一つの人間の顔、一つの身体

の輝きと、またそれのもつ広大な風景に優ることはできない。Jacques Petit のthématiques も、Bornecque と同じ点より出発する。

“Lecture des Diaboliques”⁶⁾の中に挙げられた thématiques を以下に記してみると次の如くである。既ち, l'enfant rejeté, la femme-sphinx, l'amazone et l'androgyné, la castration, la profanation, la provocation et le scandale, la destruction. である。(これらのテーマはいずれも既に J. Petit その他による, Barbey d'Aureville No.1~9 までに部分的に検討されてきたテーマである。)

J; Petit の上掲書は、先ず récit の構造分析に始まり, “histoire” の構造, milieu の構造のそれぞれの分析検討のあと, 抽出された上記の如き thématiques の各個についての検討が続いている。これより先, 既にこの著者は, “Notes sur la structure des Diaboliques”⁷⁾において, その基本的な構造を“linéaire”であり, 同時に“circulaire”であることを明示している。前者は「遅滞」と「重積」の性格をもち, 後者はテーマやイメージの重複であり, 冒頭への回帰の構造である。J. Petit も言う如く, 作品を一つ一つ比較検討することにより, “Les Diaboliques”の構造を明らかに再構成することができるのである。そしてそれには先ず formel な研究より始めねばならないとしているのである。Jean Verrier の“Les Dessous d'une Diabolique”⁸⁾は, この formel な各個研究の最初のものであり, その意味での一つの指標と見なしてもよい論考であろう。

Jean Verrier のこの論考を少し精しく見てゆくことにする。先ず syntagmatique な軸に従って各人物を紹介する。“dramas cruels, terribles”は既に物語の冒頭の部分で予告はされているが, その物語の三分の二に至るも, 筋には何の進展もなく, ただ人物の portrait のみが浮彫りにされていることに言及している。第一の narrateur が先ず baronne de Mascranny の portrait を描く, この narrateur がこの物語

の初めを語り、そして終末を語る。開始と終焉の両扉となっている。彼は第二の narrateur の聞き手となる。場所は同じ Mascranny のサロンである。第三の narrateur は、若年のため、父から聞いた当時の模様を語る。第四の narrateur は、数年後、第二の narrateur にエピソードを伝え、これを第二の narrateur が物語る。こうした narrateur の重層性は、“Les Diaboliques” の殆どの物語に共通の事実であることは、ここで繰り返す必要はない。J. Verrier はこれを図式化している。この schéma はこの物語の構造を明示してくれる。更に、第四の narrateur に資料を提供してくれた第五、第六の narrateurs を想定することも可能である。この narrateur の重層性は、narration の場と fiction の場との重なりにより、尚一層複雑化することが指摘される。narrateur の重層性、récit のレベルのからみ合い、と言った既知の事実の上に、更に上記の如き綿密な考証が加えられたと言い得るのである。ところで、“Les Diaboliques” の説話形式は、基本的に一人称形式といわれる形式であり、“je” とその相関的な “tu” を想定する、いわゆる “autobiographique”⁹⁾ とされる形式である。Jean Rousset は、narrateur の “statut”¹⁰⁾ として三通りに分類する。第一は、殆ど完全に impersonnel なテキストの中へ “discours personnel” が入りこむ場合であり、“Odyssee” や Stendhal が挙げられている。第二は、これとは反対に “discours” の中への “récit” の侵入である。J. Rousset は “M. Teste”, “Dr. Faustus” を例として挙げている他、dialogue 形式の “le Neveu de Rameau” や Camus の “la Chute”, それと書簡体形式もこの場合であるとしている。第三は、以上の二極の中間に存在する narrateurs のリレーといわれるもので、je/je/je の構造をもつものであり、“Les Diaboliques” や “l’Auberge rouge” がその例として挙げられている。

J. Verrier の論考にもどると、上述の如きいわゆる “narratologie” の考察に続いて、第一の narrateur と第二の narrateur のそれぞれの

最近の“Les Diaboliques”論に関するノート(田中)

séquences が、その内部において相反映し合い、その意味での重層的構造をもつことを、実例を示して論証している点は、全く新しい発想であろう。論者はこれを“reflet”と呼ぶ。一例を示すと、

Narrateur 1 C'était *le plus étincelant causeur* de ce *royaume* de la causerie.

Narrateur 2 M. Marmor de Karkoël... était le *meilleur joueur* de whist des *Trois Royaumes*.

更にいま一つの“reflet”は、人物の“topologie”にあるとする。即ち narrateur 2 と Mascranny 男爵夫人とその娘 Sybille とのトリオは、Marmor と伯爵夫人とその娘 Herminie とのトリオと反映し合うとする。

しかし、最後の章の WHIST, HIST(OIRE) といった、anagrammatique な lecture は、やや説得力に欠けるところがあるように思われる。とにかく批判点はあるが、この論考から得た確証は、上述した narration の重層性の問題と、もう一つはこれまで述べていなかった temps romanesque の問題である。J. Verrier によれば、「Portrait の役割は、多くの“Diaboliques”の中での narrateur が言うように、“これから生じること”を説明するのではなく、action を遅滞させることである」¹⁾

J. Petit はこの点に関して、Barbey d'Aurevilly の小説の時間を三つに分けて、既に次の如く述べている。

「Barbey d'Aurevilly の小説の常時存在する三つの動きの性格が、これでよく理解できる。第一のものは夢の如き蛇行する緩慢さであり、夢の色彩をもつ。[...] 第二の動きは自然であり、小説家は想像的世界に入り、自己の人生をそこに置く、第三の動きの短かさは、現実への急激な回帰が原因である」¹²⁾

即ち、第一の時間は *rêve*、第二のは *monde imaginaire*、第三のは *echec* の時間である。J. Verrier はこの小説時間の問題を再び新しい形で提示したものと言い得る。

以上検討してきた J. Verrier の論考の流れにあるものとして、Marie-Claire Ropars-Wuilleumier の “La plus belle amour de Don Juan”, *narration et signification*¹³⁾ を挙げねばならない。これは副題にも示されている如く、*narration* とその意味作用を主題とした論考である。

結論より先に述べれば、この物語は、「Don Juan により惹起された愛ではなくて、Don Juan が受けた愛¹⁴⁾」である。この結論に導く論証として、再び *narration* の重層性が取り上げられているのである。ただ、この論者も最初に断っている如く、G. Blin のいう “*intrusion d’auteur*” ではなくて、いわゆる “*mode de manifestation des événements*” が問題とされているのである。そしてこの “*mode de manifestation*” が *narration* の特殊な重層性より出てくるという論旨である。第一章が *dialogue* で始まるこの物語は、その方法において、複雑性と拡大性の極地にあるという。この *dialogue* は、即ち *drame* の形式に則り、先ず数人の人物を舞台に乗せ、その受け答えにより、それらの人物の “*statut*” を明らかにする。先ず人々の話題となる “*il*” なる人物が洗われ、これはこの第一章の章末でその名が明らかにされる。Jules-Amédée-Hector de Ravila de Raviles である。次に “*elle*” がくる。これは第二章の最初にその名が明らかにされる。即ち、*marquise Guy de Ruy* である。次に “*je*” がくる。その役割は、最初は不明確であるが、彼は三日前にあった夜食の会のことを聞いて知っている故、それを語る。しかし次に続く事柄の *narrateur* の役割を与えられてはいない。ただ次第に *narrateur* としての資格を得、第二章の終末でそれを認められる。ただ Don Juan 自身から聞き得た話を物語るに過ぎない。第三章

で、第一の narrateur が語る夜食の場で、Don Juan はその一員でもあるが、途中で narrateur に変貌し、第四章での“je”に変わる。次に第四章で, portrait を描かれた“jeune marquise”は, héroïne であるが、彼女自身第五章で narrateur となる。即ち Don Juan の話は、実際には彼女が Don Juan にした話である。そして全ては彼女が母親にした話で終る。このように、人物として登場し、描写された主人公たちは、次々と narrateur へと変貌をとげて行くのである。narrateur が次の narrateur を呼ぶ形式である。しかし最後には、結局のところ récit が若い娘を殺してしまう。

「彼女は narration の根源として現れる。彼女の方向に全ての récit が遡る。そして récit が彼女を殺す。彼女があらゆる意味において、その récit の根源であったからだ」¹⁵⁾。

そして、彼女こそが知識のレベルでは démoniaque である。彼女は全てを知っている。実のところ彼女のみが全ての récit の narrateur の資格をもち得るのである。物語の最後に至って、再び語る第一の narrateur が、Don Juan を“il”で呼び、こうして Don Juan は再び fiction の人物になってしまう。即ち Don Juan は全能の人から欠落の人になり下る。と論者は言う。即ちこの物語は、最初に掲げた結論の如く、Don Juan によってひき起された (suscite) 物語ではなく、彼が受けた (subi) 物語りである。

以上検討してきた J. Verrier 及び M-C. Ropars-Wuilleumier の論考は, récit の内部の narration を中心とした formel な研究であり、いわば、“Formes narratives et analyse du récit”の範疇に属する研究である。これは現在の文学研究の一方向を示すものである。

こうした新しい批評の傾向をもつ“Littérature”誌の Bibliographie によって、“Les Diaboliques”内至 Barbey d'Aureville に関する essais を以下に列挙してみることにする。

Dietmar Rieger: "*Le Rideau cramoisi von Barbey d'Aurevilly*"¹⁷⁾
(1972)

精神分析的方法による論考である。「紅いカーテン」が遮蔽と暴露という二重の機能をもつものとして、次の二つの分水界を作る。つまり現在と過去、それに主人公のナルシシクな逆行と Dandy という社会的な一つのタイプとの間の意識、無意識の境界がそれである。

Raymonde Debray-Genette: "*Un récit autologie — Le Bonheur dans le crime*"¹⁸⁾(1973)

方法は異なるが、J. Verrier の論考と同じく、narration の過程がその中心点となっている。「物語を読むことは、narration の過程を読むことである。読書は、いろいろ異った systèmes をはたらかせるために、規則を発見せねばならない一つの jeu である」¹⁶⁾この J. Verrier の言葉は、Ph. Berthier も指摘する如く、この論考の基底となる記述である。即ち、直線的な読書を排し、反対に、断層の把握、種々のレベルの中継、重層性の中に本質的なものがあるのである。論者はテキストの中に、“denivellements narratifs” (説話の起伏)があり、これが narration の対象物の伝達を遅滞させる。先ず “je” が現われる。これが narrateur-scripteur であるが、第二の narrateur (doteur Terty) が現れると、単なる “narrataire” となる。この “je” は、物語の終末で女主人公に彼もまた恋をし、Terty と共に物語そのものの中に入る。しかし、彼自身は参加することはできない。作者 Barbey d'Aurevilly は、読者も彼と共に物語に入るよう récit を設定している。いわゆる “complicité du lecteur” の効果である。論者はこうしてこの物語を “Le Bonheur dans le récit” と名付けられ得るとするのである。

Marcelle Marini: “*Ricochets de lecture, la fantasmagorie des “Diaboliques”*”¹⁹⁾(1973)

これも精神分析的手法の論考である。“Les Diaboliques”全般に渡る、いわゆる“lecture intertextuelle”の実践である。“Le Bonheur dans le crime”のdocteur Tortyは夜 Savignyの館に近づき、ComteとHauteclairの抱擁を垣間見る。“A un Dîner d’Athées”においては、Mesnilgrandは部屋の押入れにかくれ、YdowとRosalbaの争いを目撃する。この二例により、秘められた内容、“non-dit”, “non-su”, “non-reconstruit”を分析するのである。“直線的”なlectureを排し、物語のfantasmeに迫る方法である。またしばしば見られる過去への回帰の中に、論者は“inquiétante étrangeté”を読みとり、“inconnu”, “innommé”を前にして、読者は自己の“désir”をそこに認めるのである。とにかく、“Les Diaboliques”全体の中に、内奥の統一的fantasmeを読みとり、「無意識的相剋の象徴的構造」を探求せねばならぬとするものである。

Francoise Gaillard: “*La représentation comme mise en scène du voyeurisme*”²⁰⁾(1974)

書評によれば、やはり“fantasme”を取り扱ったもので、リアリズム文学、特にBarbey d’Aurevillyの“voyeurisme”をその焦点としている。“savoir”は“voir”であり、“voir”とは“voir à travers”であるとす。narrateur自身に住む“voyeurisme”の研究といえよう。

* * *

「Les Diaboliques」は遂にその“statut textuel”を獲得した。喜ぶべきことである。そこで問題は、全てがこれからなされるべきである。この作品を体系的にあらゆる形の lecture にゆだねねばならない。社会的、主題的、構造主義的、そして精神分析的、言語学的、記号学的、文体論的な研究に」。²¹⁾

今までのところ、上述の如く、narration 中心の研究が多数を占めていることが理解されるであろう。そして“Les Diaboliques”が新しい文学研究の素材としてその位置を占めるに至ったのは、やっここ数年前からのものであることも認めねばならない。Ph. Berthier も、この現象は、現代の文学批評の方向にその理由があるとしている。しかし、“Les Diaboliques”なる texte が、いわゆる“narratologie”の傾向にとって、好個の matière を提供していることも否めない事実ではなかろうか、ただ、過度の“scientisme”への過信を警戒し、この「作品」を何かのついきならぬものと等式に置くことの危険を、Ph. Berthier と共に恐れねばならない。Armand Hoog の“Le temps du lecteur”²²⁾も、同様の警句に満ちた書で、“homo criticus”となった批評家に対する危惧の念より出発している。われわれは、次の Ph. Berthier の言葉により、このノートの結語としたいと思う。「われわれは永い間、“真相”と考えてきたことに関心を示してきた。何故なら探索の方法をもたなかったからだ。現在はその反対に方法論を多くもち過ぎている。だが果して texte は完全に把握されたであろうか。より正確に言えば、その matérialité においてはそうであろうが、果してどこにその深さと意味とを置くべきであろうか。局面はいろいろあった。判断の時の次に解釈の時がきた。われわれの時代は、より謙虚な（あるいはより野心的な）arpenteur の時代である。精細で反駁の余地のない測量図を準備して、かくして未来において錯誤のないようになし得ると確信する」。²³⁾

NOTES

- 1) in *Barbey d'Aurevilly No. 9.* (1974)
- 2) Ph. Berthier, op. cit., p. 91.
- 3) *Les Diaboliques* (Garnier, 1963) p. cx.
- 4) Ibid., p. cxī.
- 5) Ibid., p. cix.
- 6) édition Minard. (1974)
- 7) in *Barbey d'Aurevilly No. 4.* (1969)
- 8) in *Poétique*. No. 9. (1972) sous-titre: Lecture de la Nouvelle de Barbey d'Aurevilly "Le dessous de carte d'une partie de whist".
- 9) E. Benveniste: *Problèmes de linguistique générale.*, p. 238.
- 10) J. Rousset: *Narcisse romancier.*, (1973) p. 18~p. 22.
cf) G. Blin: *Stendhal et les problèmes du roman.* (1954)
G. Genette: *Figures II* (1969)
- 11) *Poétique No. 9.* p. 53.
- 12) Jacques Petit: *Temps romanesque*, in *Barbey d'Aurevilly.* No. 4 (1969)
p. 42~p. 43.
- 13) in *Littérature*, No. 9. (1973)
- 14) Ibid., p. 125.
- 15) Ibid., p. 124.
- 16) J. Verrier., op. cit., p.59.
- 17) in *Germanisch-Romantische Monatschrift* No. 2.
- 18) in *Romantic Review*, January.
- 19) in *Littérature* No. 10.
- 20) in *Revue des Sciences Humaines* No. 154.
- 21) Ph. Berthier. op., cit., p. 103.
- 22) Armand Hoog: "Le temps du lecteur" (P. U. F.) (1975)
- 23) Ph. Berthier. op., cit., p. 104.